A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

12

夏目漱石(一)

中央公論社

日本の文学　12

©1964

夏目漱石(一)

昭和39年12月 5 日初版発行
昭和39年12月 9 日4版発行

価390円

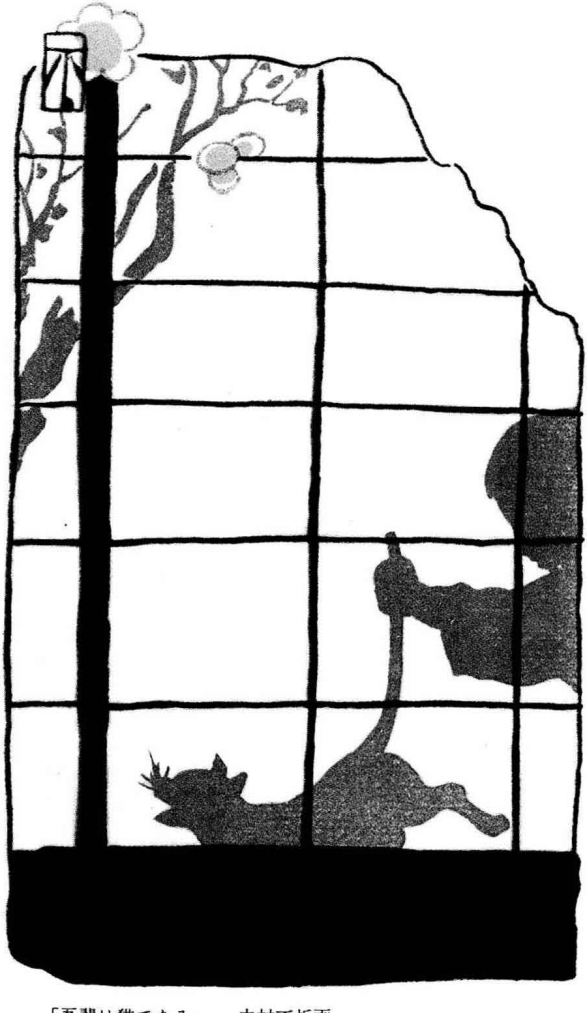
発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　矢嶋製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

大正元年9月撮影



「吾輩は猫である」　中村不折画

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

目次

吾輩は猫である　5
坊っちゃん　321
草枕　416
注解　509
解説　中野好夫　530
年譜　546
口絵　中村不折　「吾輩は猫である」
挿画　中村不折　「吾輩は猫である」
近藤浩一路　「坊っちゃん」

「草枕」　平福百穂

カット　「吾輩は猫である」　橋口五葉

夏目漱石

(一)

吾輩は猫である

一

吾輩は猫である。名前はまだない。

どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。吾輩はここではじめて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時時我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考えもなかったから別段恐ろしいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬罐だ。その後猫にも大分逢ったがこんな片輪には一度も出会わしたことがない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぽくて実に弱った。これが人間の飲む煙草というものであることはようやくこのごろ知った。

この書生の掌のうちでしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのかわからないがむやみに眼が廻る。胸が悪くなる。とうてい助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何のことやらいくら考え出そうとしてもわからない。

ふと気がついて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までのところとは違ってむやみに明るい。眼をあいていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎いに来てくれるかと考えついた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。そのう

ち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食い物のあるところまであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這って行くとようやくのことで何となく人間臭いところへ出た。ここへはいったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく言ったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうしていいかわからない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るという始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家のうちにはいっておったのだ。ここで吾輩はかの書生以外の人間をふたたび見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へほうり出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天にまかせていた。しかしひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出来ん。吾輩はふたたびおさんの隙を見て台所へ這い上がった。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上がり、這い上がっては投げ出され、何でも同じことを四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんという者はつくづくいやになった。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやってから、やっと胸のつかえが下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出してもお台所へ上がって来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛をひねりながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんならうちへ置いてやれといったまま奥へはいってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へほうり出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家ときめることにしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合わせることがない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書斎にはいったぎりほとんど出て来ることがない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書斎を覗いて見る

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

が、彼はよく昼寝をしていることがある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。そのくせに大飯を食う。大飯を食ったあとでタカジヤスターゼを飲む。飲んだあとで書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考えることがある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生まれたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬことはないと。それでも主人に言わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来るたびに何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。どこへ行っても跳ねつけられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでもわかる。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいることをつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きというわけではないが別にかまい手がなかったからやむをえんのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気のよい昼は縁側へ寝ることとした。しかし一番心持のいいのは夜に入ってここのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょにねることである。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入って一間へ寝る。吾輩はいつでも彼らの中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眠がさますが最後大変なことになる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先だってなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼らを観察すればするほど、彼らはわがままなものだと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至っては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、ほうり出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちょっと畳で爪を磨いだら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他がふるえていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君などは逢うたびごとに人間ほど不人情なものはないと言っておらるる。白君は先日玉のような子猫を

四疋産まれたのである。ところがそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四疋ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我ら猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを剿滅せねばならぬといわれた。いちいちもっともの議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権ということを解していないといって大いに憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見つけたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えてよいくらいのものだ。しかるに彼ら人間は毫もこの観念がないと見えて我らが見つけたご馳走は必ず彼らのために掠奪せらるるのである。彼らはその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪ってすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんなことに関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄えることもあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよかろう。

わがままで思い出したからちょっと吾輩の家の主人がこのわがままで失敗した話をしよう。元来この主人は何といって人に勝れて出来ることもないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやってほとぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝ったり、謡を習ったり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、気の毒なことには、どれもこれも物になっておらん。そのくせやり出すと胃弱のくせにいやに熱心だ。後架の中で謡をうたって、近所で後架先生と渾名をつけられているにも関せず一向平気なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰り返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考えになったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰って来た。何を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。はたして翌日から当分の間というものは毎日毎日書斎で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまりうまくないと思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下のような話をしているのを聞いた。

「どうもうまくかけないものだね。人のを見ると何でもないようだがみずから筆をとって見るといまさらのようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほ

ど許りのないところだ。彼の友は金縁の眼鏡ごしに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかけるわけのものではない。むかし以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言ったことがある。画をかくなら何でも自然そのものを写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんなことをいったことがあるかい。ちっとも知らなかった。なるほどこりゃもっともだ。実にその通りだ」と主人はむやみに感心している。金縁の裏にはあざけるような笑いが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく縁側に出て心持ちょく昼寝をしていたら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっておる。ふと眼がさめて何をしているかと一分ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトをきめ込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚えず失笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の友に揶揄せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆をとっているのを動いては気の毒だと思うて、じっと辛棒しておった。彼は今吾輩の輪郭をかき上げて顔のあたりを色彩っている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乗の出来ではない。背といい毛並といい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決して思っておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらをまぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議なことは眼がない。もっともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしいところさえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおってやりたいと思ったが、さっきから小便がもよおしている。身内の筋肉はむずむずする。もはや一分も猶予が出来ぬ仕儀となったから、やむをえず失敬して両足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてこうなって見ると、

もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ちこわしたのだから、ついでに裏へ行って用を足そうと思ってのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りをかきまぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴った。この主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も知らないで、むやみに馬鹿野郎呼ばわりは失敬だと思う。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る時に少しはいい顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、こっちの便利になることは何一つ快くしてくれたこともないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とはひどい。元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来ていじめてやらなくてはこの先どこまで増長するかわからない。

わがままもこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にしたことがある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持ちよく日のあたるところだ。うちの小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の気を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時ごろであったが、吾輩は昼飯後こころよく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心づかざるごとく、また心づくも無頓着なるごとく、大きな鼾をして長々と体を横たえて眠っている。他の庭内に忍び入りたるものがかくまで平気に睡られるものかと、吾輩はひそかにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかった。彼は純粋の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上になげかけて、きらきらする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出ずるように思われた。彼は猫中の大王ともいうべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘ってばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかっとその真丸の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀というものよりもはるかに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸の奥から射るごとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、おめえは一体何だと言った。大王にしては少々言葉が卑しいと思ったが何しろその声の底に犬をもひしぐべき力

がこもっているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと険呑だと思ったから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平気を装って冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておった。彼は大いに軽蔑せる調子で「なに、猫だ？　猫が聞いてあきれらあ。全てえどこに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はここの教師の家にいるのだ」「どうせそんなことだろうと思った。いやに瘠せてるじゃねえか」と大王だけに気焔を吹きかける。言葉つきから察するとどうも良家の猫とも思われない。しかしその肩切って肥満しているところを見るとご馳走を食ってるらしい、豊かに暮らしているらしい。吾輩は「そう言う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかった。「おれあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちっとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になっている奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々軽侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試して見ようと思って左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いにきまっていらあな。おめえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強そうだ。車屋にいるとご馳走が食えると見えるね」

「なあにおれなんざ、どこの国へ行ったって食い物に不自由はしねえつもりだ。おめえなんかも茶畠ばかりぐるぐる廻っていねえで、ちっとおれのあとへくっついて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違えるように太れるぜ」

「追ってそう願うことにしよう。しかし家は教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「べらぼうめ、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」

彼は大いに肝癪にさわった様子で、寒竹をそいだような耳をしきりとぴくつかせてあららかに立ち去った。吾輩が車屋の黒と知己になったのはこれからである。

その後吾輩はたびたび黒と邂逅する。邂逅するごとに彼は車屋相当の気焔を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

ある日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶畠の中で寝ころびながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向って下のごとく質問した。「おめえは今までに鼠を何匹とったことがある」知識は黒よりもよほど発達しているつもり

だが腕力と勇気とに至ってはとうてい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したる時は、さすがにきまりがよくはなかった。けれども事実は事実で詐るわけには行かないから、吾輩は「実はとろうとろうと思ってまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんと突っ張っている長い髭をびりびりと震わせて非常に笑った。元来黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあって、彼の気焔を感心したように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればはなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いっそのこと彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶を濁すにしくはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分とったろう」とそそのかして見た。果然彼は墻壁の欠所に吶喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとったろう」とは得意気なる彼の答えであった。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちってえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向ってひどい目に逢った」「へえなるほど」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて言う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へ這い込んだらおめえ大きないたちの野郎が面くらって飛び出したと思いねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちってけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生って気で追っかけてとうとう泥溝の中へ追い込んだと思いねえ」「うまくやったね」と喝采してやる。「ところがおめえいざってえ段になると奴め最後っ屁をこきやがった。臭えの臭くねえのってそれからってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至ってあたかも去年の臭気を今なお感ずるごとく前足を揚げて鼻の頭を二三遍なでまわした。吾輩は少々気の毒な感じがする。ちっと景気をつけてやろうと思って「しかし鼠なら君に睨まれては百年目だろう。君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥って色つやがいいのだろう」黒のご機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は喟然として大息していう。「考えるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとったって——いってえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとった鼠をみんな取り上げやがって交番へ持って行きゃあがる。交番じゃ誰が捕ったかわからねえからそのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんかおれのおかげでもう一円五十銭くらい儲けていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありゃしねえ。おい人間てものあ体のいい泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理屈はわかると見えてすこぶる怒った容子で背中の毛

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong